代というのは、まだ非常にストイックなところがありましたよね。儒教主義と言いますか。今、わりと世俗的ですよね。

東郷　そういう人ばかり役人になるというのは、思い上がりじゃないけど、そういうところがあるわけでしょうね。

吉川　今、少しそれが崩れてきているというのは、特に情報公開して、役所もさんざん叩かれたから、ある意味で開き直って、もうこれ以上叩かれても何も出ないよというふうになっているところがありまして、そういう意味では…。

恒松　それは前とは随分違いますよ。今は変わってきていると思います。

吉川　だから、無謬性というのは、心情的には無謬性はずっと言っていたいし、それを自分が「いや、間違うかも知れない」と記者会見でやったら、上司に怒られますからね、そういう意味では、全部繋がっているわけで、言いにくいでしょうが、徐々に変わってきてはいると思います。

恒松　それは変わってきているとは思いますね。

吉川　無謬性のその結果が、実は例の薬害エイズで言えば、何か見つかった時に、出すのではなくて、無謬性をどこまでも守るために隠すという方に動いてしまうわけでしょうね。その無謬性が逆方向に動いているんだから、それを解放して、責任を軽くしてあげないといけないですね。あとは、情報公開というのは避けられないのだということがみんながわかるようになれば、少しは気持ちも楽になる。

恒松　それは昔とは随分変わってきたとは思いますけど、基本的にはやっぱりそういうところがあるんですよね。

吉川　そうかと言って、ソ連はどうか、あるいはアメリカの役所はどうかと言うと、アメリカの役所はもっと、無謬性という意識はないでしょうけど、もともとアメリカの役所というのは、それほど真剣に仕事をやっていないような役所ですから、そういう意味では気が楽なのかも知れないし、アメリカというのは、もともと役所がそれほど強いリーダーシップを持っているところじゃないから、そういう意味ではいいのかも知れないですけどね。

谷　アメリカの役所は、かなりの部分が政権と一緒に変わるでしょう。だから、無謬性とか言ってられないですよね。

恒松　無謬性でないことを強調しないと、政権がもたないということですからね。

谷　先程、奥田先生が言われたところに話をもう一回持っていきたいのですけど、そうすると、20 世紀型が産業社会で、超高層ビルで、かなり無機質で、人間と人間の関係が薄くなるような都市だとしたら、21 世紀型はそれをどうやって打ち壊して、どういう方向に持っていけば安全な都市になるんですかね。

奥田　20 世紀はそんなに人と人の関係が希薄で無機質とは思っていないので、やはり、右肩上がりじゃないけど、ある種の力強さみたいなものがあるから、その中では貧富の差があっても、人の生活とか家族生活にしても、割合そういう確からしさみたいな手ごたえがあった時期、そういうような基盤なり枠が何となく見えなくなり出してしまった。

谷　20 世紀も 80 年代位まではそういう感じがあったんですが、それ以降、私の感覚では不安ばっかりあったような…。

奥田　ここでそういう話をすると、この間みたいに「ガチンコクラブ」みたいな話に戻るからしませんけど、でも、今ちょうど「寅さん」シリーズの最初から全部見て、最初の頃を見ると、まるで今の寅さんと違っていた。あの時寅さんは、一番憧れているのは、汗水流して働きたいんだと、風呂屋の釜炊きでも何でもやりたいという、今のマドンナシリーズとはまるで違っていて、それが軟弱なものに変わり出した。あれはまだたかだか 1960 年代ですよね。そういう都市像があったんじゃないですか。力強い、汗するとか。

吉川　21 世紀の都市像と言えるかどうかわからないですが、今色々な地域計画分野、あるいは都市計画屋さんの分野で、言葉としてはスマートコミュニティという言葉が使われていますよね。あるいはスマートグロースとかいうのも同じような話だと思うのですが、要するに、コンパクトなまちにして、インフラをどんどん広げて、それによって色々な、通勤のいわば労力があるのを軽減する、あるいは全体としてのエネルギー消費を少なくする、あるいは人と人とのつながりがもっとコンパクトになるだろうと、そういう多分共通な意識で、環境面あるいは人間の心理の面、あるいはコミュニティの形成という色々な分野から、ともかくコンパクトなというのは、アメリカでもヨーロッパでも言われていますよね。多分これがもしか

したら21世紀のイメージとしての色々な提案だと思うんですけどね。

その時に、今の日本を見ていて、そういうスマートと言われる、要するにコンパクトなサステイナブルなまちと言った時に、では東京の都市再生がなぜそういうスマートコミュニティと違ってしまうのかと言うと、他方で国際経済と言うか、国際競争の話というのは、常に特に大都市に入ってきてしまって、東京はそういうものを一方で目指したとしても、他方でユニクロの製品がどんどん入ってきてどうするんですかというような話が出てくると、じゃあ自分の経済的基盤を何とか守っていくためには、競争せにゃならんという話が他方で出てきてしまって、そういう豊かな生活というのは、どうしても経済の活力と矛盾するじゃないかというのが、大体常に役所で出てくるバランスなんですね。秤になってしまって。そうすると、最後にはどう行くかというと、背に腹はかえられないから、ともかく経済的に明日の飯を稼がねばならんのだというので、スマートなコミュニティの話が後回しになっていく。日本の今の議論と言うか意識を見ていますと、そんな感じがして、結局は20世紀型のモデルに戻っていってしまう、そういう感じですよね。

谷　私は、ちょっと言い方がまずかったかも知れないけど、奥田先生に伺いたかったのは、今は非常にモビリティが高いんですね。例えば、私共の学生なんかでも、殆ど車を持っていて、平気で100キロや200キロ1日のうちに移動して帰ってくるわけですね。友達はいるんだけども、そんなに深く付き合っていなくて、そのかわり携帯に入っている人数は、60人、70人、人によっては100人位いる。物凄く薄く、広く付き合っているんですよ。だから、どこかに合宿したりして話をすると、本当に親友がいない、深い話ができないというような悩みを案外持っていたりするんですね。

我々の学生の頃と全然違うなと。我々が20世紀型だとすると、彼らは21世紀型なのかなという感じがするんですけど、我々の頃って、数人の毎晩飲んでいるような友達がいたり、クラブなんて言うと、毎日クラブで顔を会わしているという、そういう物凄く濃厚な付き合いで学生時代過ごしてきているんですけど、そういうのが全然ないですよね。

吉川　忠誠心みたいなものがないでしょう。それは組織に対して縛られたくないというのは、もう当たり前のこととして、就職した時から、初めから、5年後あるいは7年後にいるかとアンケートで聞くと、半分位の人がいないかも知れないというふうに、そういう時代だから、私らの頃とは全然違うわけですよね。

そうかと言って、意外と今の人達は不安感も余りなくて、そんなに贅沢はできないけれども、別に今位の年収、最初に就職して、初任給22万か23万もらって生活すれば、別にできるじゃないかと。また、自分のおじいさんやおばあさんに結構お金がありそうだからとか、そういう感じで凄い楽天的ですよね。それが僕らの世代からすれば、それじゃ会社とか世の中がどんどん走っているのに、あなた方が支えなくちゃいけないのに、というのがまた僕らの価値観、あるいはもっと上の価値観で、そんなのは全然違うので、彼らは自分の生活があり、食うに困らないからいいんですよと、そういうふうになってきている。

谷　ただ、聞いてみると漠然とした不安も持っているんですよ。ただ、具体的に何か不安なのかと聞くと、何にもないんですよ。全て一応満足しているんですね。

恒松　それは不安な現実がないからでしょうね。

谷　そうそう、目の前にはないんですけど、何か将来に向かってはやっぱり漠然とした不安はあるんですね。環境問題だとか、人口問題だとか、色々な問題は漠然と不安はあるんですよ。

東郷　たまたまそのお話が出たから、僕が年を取りすぎたのかも知れませんが、特に若い女性なんかが携帯で、僕らはあれが目の敵みたいに見えて、それだけ「お前らじいさんだ」と言われるだけの話なのかも知れないんだけれども、とにかく見ている限り、若い男性以上に、それこそ電車の中も含めてあるでしょう。だけど、僕らがわからないのは、結局、さっき谷さんが言われたように、正に広く浅くで、逆にそれでどこかといつも繋がっていないと不安だから、それをやっているんだという話をよく聞くんです。僕は若い人とぎりぎり議論したこともないので、よくわからないんだけど、非常によくそういう話を聞くんですよね。だから、その種の不安というのはあるのかな。それがあるから、何かいつも人と繋がっているという話があるのかも知れないですね。

谷　例えば、静かであることとか、何もすることがないとか、そういうのには耐えられないんですよ。それは恐らく我々の世代も大分そうなっていると思うのですけど、子供の時からテレビがいつも家にあって、何らか動くものを見ている、音を聞いている、いつも音楽を聞いている。だから、静かで何もすることがなくて、思索するとか、恐らく今の若い人は凄く苦手だと思いますね。我々もどっちかというと苦手です

けど。一人でいると、すぐラジオとかテレビをつけちゃいますけど。
東郷　例えば森林浴じゃないけど、ああいう所まで行って、ラジカセなんかでギャーギャーやられると、せっかくここまで来たのにと思うんです。だから今の話と僕は通じると思うのね。ここまで来たら静かでいいじゃないかとも思うんだけど、あそこまで行っても賑やかな音楽を聞いていないとおさまらないという、そうまでしてあそこまで来なきゃいけないかと思うんだけど、そういう面があるんじゃないですか。
奥田　ちょっと話が違いますけど、いつもここで話をします新宿・池袋の外国人調査の最後の調査に、みんなインタビューに出ているわけです。そうすると、調査地で女子学生やなんかはやっぱり少なくとも教師としては不安があるわけです。余りそういう不安をかきたてちゃいけないと思うけど、今は携帯がフルに活躍して、調査地に行っていても、お互いに連絡がしやすいということもあるし、それから、ゼミそのものも八王子の大学までわざわざ出て来なくても、お互いに情報交換その他みんなやっているわけですね。
　だけど、先週、調査で教室へ出てきて、私がこういうふうにして、学生はこういて、そんなふうに話をしていたんです。こんな時代になっても教師は相も変わらずスパルタ的に、「君は10人もインタビューできないか」なんて言ってちゃまずいかなと思っていたら、学生の受け止めがちょっと違って、「今日は凄くよかった」と言うんですね。どうしてかと言うと、普段そういうふうに携帯ばっかりでやっているけど、久しぶりに教室で机を囲んで教師と直接話して、教師の嫌味なんかを久しぶりに聞くことができたし、学生同士で話すこともできて、ゼミってやっぱりこうやって会うことが…そういう言い方はしなかったけど、学生はみんなそう感じたというか、なるほど、そこにそういうような新しいゼミのあり方を考えていかなくちゃいけないし、教師と学生の関係も変えていかなければいけないなと。みんな情報で済ませるかと言うと、そういうものじゃないということは言えるわけで、それがはっきり、大学もそうだし、ゼミ一つにしても、教師と学生の関係でも、調査のあり方でもそうですよね。
谷　人間の関係が濃い薄いというのは主観的なものだから、彼らは結構それで濃いと思っているのかも知れませんけども、どうなんですかね、例えば…。
奥田　濃い薄いじゃなくて、もうスタイルが変わってきたし、モチベーションなり価値観が変わってきている。
谷　例えば私の大学だと、必ずゼミ単位で合宿をするんです。そうすると、全然その合宿の前と後で関係が変わってくるんですよね。
奥田　だから、合宿だって今までの合宿と違って、学生にとって凄いインパクトがあることで、決してうっとうしいことじゃないんですね。
谷　ええ、そういうことをやれば、やっぱりそういうものを受け入れる素地はあるんだと思いますね。必ずしも嫌っているわけじゃなくて、多分、今のスタイルに合っていない。
恒松　都市問題と言うかそういう時に、都市の規模が問題なんですかね、それとも都市の形態と言うんですかね、建物のあり方とか、それからインフラの整備の状況とか、そういうことが問題なのか、都市の規模もうそれ自体が問題なのかということは問題になりませんかね。そうすると、非常に巨大都市と言うか、東京都が大きな都市であるのか、あるいは東京の中の新宿という地域が一つの都市として考えて、それだったら大した大きな規模じゃないじゃないかとか、そういう都市の規模と関係するんでしょうかね。
奥田　規模の大きさだけじゃなくて、街区レベルでも、コミュニティレベルでも、極めて多様化している。外から見ると多様化していますよね。属性なり背景にしたって。だから、ニューヨークは世界の縮図だと言うけど、正にそうですよね。イスラムの問題が遠い先のアフガニスタンの問題じゃなくて、ニューヨークそのものですよね。
　そういう意味では新宿だって、同じことをいつも言うようですけど、ついこの間私出かけて人と歩いた時に、そういう地域、大久保とか百人町とか歌舞伎町を抜けてずっと駅に向かったんですけど、今までは新宿通りの紀伊国屋のあそこに来ると、完全にもう従来の新宿イメージだったわけです。この間歩いたら、境目がわからなくなって、あの新宿通りのあっちも全く歌舞伎町の延長ですよ、人並みやなんかを見て。極端に言うと、プラットホームに来ても、ざわざわざわざわして、街全体が薄汚れてきて、言葉はちょっと語弊があるかも知れないけど、ちょうど香港の下町みたいな雰囲気ですよね。だからその意味では、新宿というのは国際都市の仲間入りを完全にしたという感じがします。だから、あそこで事件が起きる時に、例の歌舞伎町何とか事件があったけど、そこだとすぐわかったんです。あれをあの現場で見たら、何という話じゃないんですね。あのこと自体はですね。本当、香港ですよね。香港風景化してきたと。その中で

様々のこれからの出来事というものを考えていかなければいけないんじゃないかなと思うんですけれど。
谷　恐らく新宿とか渋谷というのは、東京の中では非常に特異ですが、大半の所はそういうモザイク構造にはなっていなくて、どちらかと言うと、混ざり合ってべたっと同じような、境目もわからないという街が多いのではないかと思います。

ただ、ニューヨークなんかは、奥田先生がおっしゃるように、どこまで行ってもモザイクですね。明らかにここはアイリッシュだけが住んでいるとか、ここはジューイッシュだけが住んでいるとか、かなり特化していますよね。特に彼らは教会単位で住んでいますから、同じ白人に見えても、プロテスタント系だとか、プロテスタントでも色々宗派があって、私もよく知らないんですが、メソトルシストラとか何とか全部違うんですね。日本はそれがまずないですよね、宗教が。「私、一向宗です」とか言う人はいませんから（笑い）。

恒松　宗教はないですよ、本当にね。確かにないと言えばないでしょうね。お葬式とか結婚式に、まあ結婚式はみんな同じだけど、お葬式の時が違うぐらいのことですね。

谷　日本の都市は、大きくなるとまとまりがなくなるのかなという気はしますけどね。

恒松　僕はニューヨークはよく知らないけど、ニューヨークなんかはまとまりがあるんですか。

谷　ええ、例えば地区でミニコミが出ていたりとか。

吉川　たくさん人が住んでいますものね、マンハッタンなんかにね。だから、本当に道一本入れば普通のアパートで、普通の人達が生活しているというのは、東京と全然違う風景だから。

奥田　だから、仕切りをするのはストリート一本だとよく言います。ストリート一本隔てると、人種、階層だけでなくて、ラップ音楽の流れまで変わり出すとよくジョークで言われるけど、本当にそういう感じですよね。

伊藤　都市の適正な規模とか、例えば、安全に暮らすためのシステムをどうするかとか、起こった時にどうするかという、先程はシステムをつくる立場からの皆さんお話だと思うのですけれども、そういう意味で言えば、今回の 9 月 11 日というのは、そういう危機管理に携わる人達にとって、かなり衝撃だったと思うんですけど、逆に一般市民の立場から言うと、私は余り変わっていないんじゃないかと思うのです。日本国民ですよ。

先程、狂牛病の方が石川県の方では大変だというお話がありましたけれども、私の実家は町田なんですけれども、あそこは今連続放火事件の問題がありますでしょう。いつ火がつけられるかわからないような、近所で毎週起こっているわけです。そうすると、テロなんかよりも、そっちの方が大問題になっているんですよね。そういうふうに、テロも専門家の方々は「これは大変だ」と言っているんですけど、一般国民は遠い国の物語を見ているような感じで、実際に自分に起こったらどうなるか、本当に炭疽菌が自分のところに来るかとか、余りそういう危機意識ってないんじゃないかなと思うんです。

今回、この研究の手法を見た時に、専門家の立場から、今後 21 世紀型の都市はこうだから、こういうふうに安全のためにやったらいいのではないかということでやるのか、逆に、先程、若い人はこうじゃないですかねという議論になると、皆さんよくわからないですよね。私も余り若い人はよくわからないですけど、そういう例えば若い人が、今回のこういうことに対して、自分達はどう思っているのか、そういう一般の人達の安全に対する危機意識とか、それから、新聞を読んだ時にどう感じるかとか、マスメディアの文章を読んだ時にどう感じて、自分はこれからそれに対してどうしたいと思うのか、という調査というのは、余り今までないような気がします。専門家の方は色々なことをやっていますけど。

私は、こういう調査手法をやるのであれば、むしろ草の根的な意見と、将来 21 世紀型の都市というのはどうかというふうに考えるよりも、今の若い人達が、色々な犯罪とか、こういう世の中になって来た時に、あなた達は自分の将来をどう思っているのか、そういうところから新しい仕組みみたいなものを考えていくというやり方もあるんじゃないかなと思います。

谷　一つ面白い事例があって、アメリカで公民権運動がありましたね。あっちこっちで黒人の暴動が起こって、あの頃できた建物というのは、外壁が非常に分厚くて、窓が少なくて、出入り口が限られていて、そこさえ閉めてしまうと、中の店とかが安全だと、そういう建物が一杯つくられたんですね。典型は、例えばボストンのコープリースクェアでしたか、それから、セントボナベンチャーというホテルがありますよね。ロサンゼルスでしたか。ああいうやつで、とにかく上はガラスで綺麗になっているんですけど、ベースの所はコンクリの窓の少ない壁でできている。全然通りに面して店が出ていないという、そういうの